

実験、実証、提案 — 筑波大学附属学校の教育



ポロニア

paulownia



筑波大学附属学校教育局
<http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/>

vol. 8

400年先を見通した植樹



附属学校教育局教育長
谷川 彰英

AKIHIDE
TANIKAWA

新年早々、新聞でよい記事を発見した。京都の清水寺では400年後を目指して数年前に植樹をしたという話である。

現在の清水寺の本堂は家光の寄進によって1633年に完成したもの。もうすぐ400年を経過することになる。ところが、現在用いられている木材はあと400年くらいしか持たないのだそうだ。そのため、400年後を目処に植樹したというのである。

400年先を見通して樹を植えるという発想が素晴らしい。この数年法人化路線のもと、目先の出来事に追われ、ゆっくり教育の本質を考える余裕もなかったが、この話を聞いてほっとする気分になることができた。子どもたちをいたずらに競争社会に追いつめるのではなく、子どもたちの未来にゆっくり思いをはせることがいかに大切かを教えられた思いだ。

教育という働きは、政治や経済と違ってあくまでも間接性の原理によって成り立っている。子どもを育てるという未来に向けての営みの上に初めて教育の効果は実現する。それは10年、20年、30年先にじわじわと実現するものである。

今年は法人化4年目。国立大学を巡る状況は益々厳しさを増してきている。そんな中でも、私たちは教育の本質を見抜く余裕を失ってはならない。教育基本法問題や教育再生会議で振り回されるよりも、私たちの目の前に生きている子どもたちの実態に鋭い眼を注ぎ、どのように教育を変えていくかに意を尽くすべきである。

附属学校を巡る状況はさらに厳しいが、目の前の現実から目を背けなければ、必ず解決策は出てくるであろう。

目次

■巻頭言

400年先を見通した植樹

●谷川彰英

■新春鼎談

特別支援学校としての新たな旅立ち

●鳥山由子、前川久男、石隈利紀、篠原吉徳……………1

■「科学の芽」賞

「科学の芽」賞、受賞者決まる●生田 茂……………3

■退職のご挨拶

退職のご挨拶●鳥山由子……………3

■研究会・研究発表会

筑波大学附属中学校 第34回研究協議会11月11日(土)の概要●館 潤二……………4

第56回高等学校教育研究大会報告●宮崎明世……………4

スーパーサイエンスハイスクール5年間の軌跡と成果
—第33回教育研究会報告—●梶山正明……………4

■名物先生紹介

附属久里浜養護学校の名物先生 一井上昌士先生—●馬場信明……………5

■指導教員の取組み

教育相談の活動●熊谷恵子……………5

伝統ある附属学校を核とした教育研究の醍醐味
—教職教育・教育実習指導とカリキュラム研究および教育史資料に関わって—●木村範子……………5

■温故知新

朝永振一郎先生の思い出●角田睦男……………6

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia

vol.8

CONTENTS

特別支援学校としての新たなる旅発ち

- ・鳥山由子(附属学校教育局次長)
- ・前川久男(特別支援教育研究センター長)
- ・石隈利紀(附属学校教育局教授)

【司会】篠原吉徳(附属学校教育局教授)



篠原吉徳先生

別支援学校」になっても、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、自閉症等の障害のある児童生徒のために、これらの障害に対応させた教育を継承し、実践していかねばいけないと思います。

今後特別支援学校になって何が期待されるかということ、各学校が連携し、多様な子どもたちへの専門性の提供、ということです。これまで、障害種別という大きな枠組みがありましたが、特別支援教育になり、障害種別だけではなくて、むしろ個別の子どもへの教育ニーズにどう対応するのかが大きな眼目になります。これから何が一番求められるかということ、多様な状態を持つ子どもたちに、その一つひとつにきちんと対応できる専門性をうまく組織化し、何かそういうものを附属学校が全体として発揮できる、発揮していける状態になって、モデル提示ができることです。現在ある専門性を、どのように機能的に統合し、より豊かな支援を展開できるのかということを追及し実践を積み重ねていくことを目指すのが、特別支援学校に求められる一番大きなところではないかと思います。

鳥山 機能的統合とは、教員全員がオールマイティになるということではなくて、専門家のネットワークが機能することですね。そういう意味でも附属学校にはそれぞれの専門性があるので、そのネットワークの可能性というものが確実に期待できるわけです。

司会 それぞれ専門家であることを十分自覚した上で5校ある障害附属が協力し合う、連携し合うということが大事であることがわかりました。

司会(篠原) 明けましておめでとうございます。お正月を祝うおめでたい話として、附属盲学校と附属聾学校の生徒さんの推薦入試の合格があります。この吉報から、筑波大学と筑波大学附属学校との関係について次長の鳥山先生のお考えをお聞かせください。

【高大連携/障害者推薦特別枠合格】

鳥山 関係を象徴するものの1つとして、高大連携がありますが、これは、附属高等学校も含め附属盲・聾・養護学校(以下、障害附属)高等部での教育と大学での教育の連携を指します。高校でやるべきことと大学でやるべきことを、双方が研究的に影響を及ぼしあい作っていく。そこに生徒がいると、双方の関心が具体的になるので推薦入学制度を導入したもので、高大連携の一環に位置づけられています。障害者推薦入試特別枠は、今年度他学類に先駆け、障害科学類にできたものです。これは、後期中等教育と高等教育を高大連携として作り上げるという側面と、特別支援教育の対象者を大学が受け入れ、教育の可能性を追及していく側面、と両面があると思います。

司会 壮大な試みが始まったということですね。附属の生徒たちにとり励みになり、他方、大学生にとっては、インクルーシブな教育に参加することになりますね。

鳥山 障害者推薦入試枠の合格者3人は、2月頃には大学に来て、あるいは

自校で宿題として課せられた、大学での勉強の「準備」にとりかかります。このカリキュラムは本学の先生と附属の先生とで一緒に作られますが、当然、通常の高等学校から来られた生徒さんにも学んでいただきます。

石隈 事前の「準備」というのは、障害がある学生さんだけではなくて、一般の学生さんにとってもヒントになりますね。高校時代に自分の将来について考える、あるいはそれを支援する指導を大学の学部教育や職業人の準備を含めたものにつなげていくというのは、障害のある生徒さんへの教育だけではなく、キャリア教育にも大きなヒントが与えられたという気が私にはします。

鳥山 今、盲学校の高1の生徒全員を大学に1日招待し、視覚障害教育を学ぶ学生に施設見学等の案内をしてもらったり、大学の授業への出席を勧めたりしています。間もなく、聾学校や養護学校にも広がるでしょう。普通附属校の生徒たちも含め、障害附属高2年の生徒を対象に、大学で勉強するのはどのようなことなのかを夏期講座のような場で、附属校と大学の先生方が協力し2~3日講義すると、高校生は大学進学という目標を明確にし、勉強に集中できる。社会貢献の意味もこめ、附属校の生徒のみならず通常学校から参加を希望する生徒をも取り込んだ形での実施を計画中です。たぶん来年実現します。

司会 それは、単なる受験指導を超えた、進路指導ということですね。インパクトが強いことが予想されます。

【障害附属の機能的統合の必要性】

司会 続いて、筑波大学特別支援教育研究センター長として、全国の特別支援学校のモデルであることが社会的使命とされる障害附属に対して期待されることを、前川先生にお話しいただきたいと思います。

前川 附属学校は、一つはモデル、あるいは拠点としての機能を果たさなければならないというのは事実だと思いますし、附属盲・聾・養護学校が「特



鳥山由子先生



【全国への発信／普通附属との連携】

司会 指導教員の石隈先生には、心理学、そしてまた、教育相談の専門家でもあるお立場から、「センター的役割」に関して障害附属に望むことをお話ししていただけたらと思います。

石隈 筑波大学附属特別支援学校に期待されることに、盲・聾・養護学校、これからの特別支援学校、あるいは教育センター、大学に対して、今後の特別支援教育の実践モデルの提示があります。先日、私は附属盲学校で、先生と生徒6人による体育の授業を見学したのですが、そこで、1人の生徒との言葉のやりとりを6人の生徒たちに先生が実況中継しているのを目撃しました。これは、生徒の視覚障害に対してなされたことでしょうか。発達障害のお子さんは、クラスで何が起きているのかがよくわからないことが大いにあるわけで、クラス担任は盲学校の先生にならない、こうしたお子さんへの援助としての情報提供は大事です。単一障害も含めさまざまな障害の専門家である筑波大学の先生方が従前にやってこられたことを、実況中継をされた盲学校の先生の意図を汲みとり、発達障害のお子さんにも応用するというように、前川先生の言葉をお借りすれば、統合、あるいは翻訳して、認知面、情緒面、あるいは教科学習へのサービスの提供をすることは、私はとても意義深いと思います。筑波大学には各障害の専門家が揃っている、さらに教科教育とか教育相談の専門家も名前を連ねていますので、協働して知見を得、それらを全国の特別支援学校、盲・聾・養護学校に発信していく。さらには、これらの学校からのフィードバックを受け、それら、特別支援教育に関する知見の精緻化を図っていくことが重要です。

司会 今のお話には、公立の小・中学校における軽度発達障害児童へのサービスの提供も含まれるということですね。

石隈 はい。全国の小・中学校、あるいは高校で発達障害、あるいは知的な遅れや視覚障害を持ったお子さんは現実にたくさんいます。筑波大学には普通の附属学校がありますし、現に苦戦している子どもたちがいますから、その中で一緒に実践し研究することは、

普通の附属学校の子どもたちのためにもなります。ところで、普通の附属学校には、教科教育、生徒指導教育相談、学校保健のエキスパートである先生方が数多くいらっしゃいますので、これらの先生方の知識、技能も活用して、モデルを作ることができると思います。

鳥山 教材・教具なんかも集積するとね、例えば視覚障害教育で使われるコンパスとか物差しとか。これら教材のうちには、学習障害（LD）に使えるものがたくさんあると思います。弱視用の教材なども、LDに使えるものが多数あり、一度そういうものを持ち寄ってみれば、弱視以外の障害児たちにも、これは使える、と思わぬ発見があるかと思っています。だから学校見学のような、相互にやり合うといいのではないかと思います。

【後輩へ向けて】

司会 鳥山先生は長らく附属盲学校の先生を務められました。先輩教員として、これから特別支援教育に取り組まれる先生方へのお言葉を賜れたらと思います。筑波大学が取り組む特別支援教育にける夢なども併せて、お話しただけたらと思います。

鳥山 若い先生方には、附属学校では腰を落ち着けて10年、20年という長さで教育に取り組むことができますので、その良さを十分生かして、実践の知を集積し、そして異分野の人たちと常に交流しながら自分を育ててほしいと思います。2つ目に、少し自分に力がついてくると、附属学校では、自分で企画立案ができます。公開講座を始めるとか研究会を発足させるとか、普通一教諭の身では絶対にできないよ

うな企画立案ができる、しかも全国に向け発信することが可能なのです。3番目は、したがって、全国には志を持った先生たちが多数おられて、附属校に、皆来たがっています。ぜひ学校を開放し、公立学校の先生たち、あるいは筑波大学はもちろんのこと本学以外の先生たち、さらには学生たちが参集し、常に学校の中にいろいろな人が入っていることが普通になってほしい。

これら3つは、私が自分自身附属についてよかったと思うことです。現にやってきたことなので、ぜひそれをシステムとして広げていっていただきたいと思います。

石隈 鳥山先生が今言われた、腰を落ち着け長くできるという継続性、企画立案ができるという開発性、そして学校を開くという開放性を、附属学校の一員として肝に銘じたいと思います。筑波の魅力は、障害教育の専門家による学校と普通教育の学校、また両者を共有できる学校教育の専門家がいて、しかも大学の教員がいて、ここでいろいろなものを作ることが可能だということでしょう。ただし、このためには全国の先生方と交流をきちんとして、全国と一緒につくる必要があります。この点で、本当に夢がある職場だと思いますし、昨今残念なことが頻発する学校現場に対して、できることはたくさんあると思います。



司会 附属学校の先生方のみならず私ども指導教員も一丸となって、学校には課題が山積しておりますが、本日3人の先生方よりご教示、ご提言いただきましたことを銘記し、また支えに特別支援教育に取り組んでいこうと思います。どうもありがとうございました。

「科学の芽」賞、受賞者決まる

附属駒場中・高等学校の小林汎副校長から、「朝永振一郎博士生誕100年記念事業」一環として、「子どもたちの『不思議に感じる』素直な気持ちに賞をあげたい」という提案が出され、附属学校の理科の先生を中心として話し合いを重ねました。

朝永先生の色紙にちなみ、「科学の芽」賞として、全国の小中高の児童・生徒から応募を募ることにしました。大学の物理教室の先生や理科教育の先生にも実行委員会に加わっていただくことができました。

また、幸いにも、毎日新聞社、時事通信社、日本教育新聞社などから後援を頂くこともできました。

全国の国立大学法人の附属学校や茨城県、東京都の教育委員会、そして、つくば市の学校などへの広報を行った結果、全国から小学生部門281件、中学生部門328件、高校生部門36件、合計で645件にのぼる応募をいただきました。

審査の結果、「科学の芽」賞として、小学生部門には8件、中学生部門8件、高校生部門3件、そして、「科学の芽」奨励賞として、小学生部門6件、中学生部門8件、高校生部門6件、「科学の芽」学校奨励賞6校を選ばせていただきました。

「科学の芽」賞の小学生部門では、北は秋田県から南は山口県、高知県に渡る全国各地の児童の作品が選ばれました。

12月23日には岩崎学長をはじめ理事・副学長の皆さんの列席のもと、「科学の芽」賞表彰式・発表会を行いました。谷川教育長の開催の挨拶に始まり、表彰状・記念品の贈呈、岩崎学長のお祝いの言葉、そして、鷲見附属小学校教諭、濱本附属駒場高等学校教諭による小学生部門と中学生部門の受賞へのインタビュー、高校生部門の受賞者による発表と鈴木附属高等学校教諭による部門講評、大高人間総合科学研究科教授による全体講評、その後、写真撮影、学長を囲んでの懇談が行われました。

「全国から果たしてどのくらいの応募があるだろうか」とドキドキしながらのスタートでしたが、幸いにして、多くの児童・生徒から応募をいただき、「科学の芽」賞の実行委員会事務局を担当した附属学校教育局総務課の皆さんの嬉しい悲鳴となりました。

附属学校教育局 生田 茂

「科学の芽」賞に応募してくれた全国の児童・生徒の皆さん、本当に有り難うございました。(応募いただいた皆さんに朝永博士の書かれた色紙の言葉の入ったマウスパッドをお送りさせていただきました。)

「科学の芽」賞の応募作品の審査を担当してくれました附属小学校、附属中学校、附属高等学校、附属駒場中・高等学校の理科の教諭の皆さん、そして3月からの長丁場をお付き合いいただきました実行委員の皆さん、事務局としてあらゆる仕事を一手に引き受けてくれました附属学校教育局総務課の皆さんに厚く御礼申し上げます。

なお、この「科学の芽」賞は、来年度も継続して実施する方向で検討することになりました。



退職のご挨拶



私は、昭和53年から平成10年8月までの21年間、附属盲学校で理科(化学)の教師として勤務しました。日々の授業で視覚に障害のある生徒の感性の鋭さに感嘆しながら、生徒とともに実験や観察を工夫して、理科の楽しさを再発見しました。また、視覚障害教育の拠点校の教員として、全国の盲学校とのネットワークづくりに関わることができました。高校生のときから、「盲学校の先生になりたい」と思っていた私ですが、盲学校の教職の実際は予想をはるかに超えて創造的な仕事であり、本当に幸せな体験をさせていただきました。

平成10年の9月から、私は心身障害学系の一員となり、大学で視覚障害教育の教育と研究に従事することになりました。学生には、視覚障害教育の実際を知り、視覚に障害のある人の目線で教育の在り方を考えられるようになってもらいたいと願って、附属盲学校の教育実践に触れる機会には学生を積極的に連れ出すようにしました。

その頃、心身障害学系では、附属障害教育学校との連携体制が始まり、附属学校の教員による大学の非常勤講師としての授業、学生の附属学校の見学授業、大学院生の附属学校でのインターン制度などが実現しました。

附属学校教育局次長 鳥山由子

平成16年度から、私は附属学校教育局次長を兼務することになりました。着任に当たって、谷川教育長から最も大切な仕事として託されたことは、大学と附属学校との連携を推進することでした。そこで、「大学・附属学校連携委員会」において附属学校と大学との意見交換を図り、連携の具体的な進め方を検討してきました。連携委員会には、11校の附属学校が必ず出席しています。また、筑波地区の先生方も大塚(東京キャンパス)まで駆けつけてくださることに、大いに力づけられました。事務方の強力な支援もあり、現在は各附属学校に、大学との連携の窓口として「連携小委員会」ができて、大学との連携も進んでいます。

筑波大学の附属学校は、それぞれの学校種において全国の拠点校として実績を有しています。全国で、筑波大学だけにあるもの、それは、普通附属と障害附属のセットとしての附属学校群です。大学には、この附属学校群を財産だと思って頂きたい。そして、附属学校はより開かれた学校を目指したい。附属学校の教育実践を通して教師として育てられ、附属学校との連携で学生を育てた経験から、そのことを強く思います。

筑波大学附属中学校第34回研究協議会11月11日(土)の概要

附属中学校 館 潤二

今年の研究協議会は午前には講演と授業、午後には授業と研究協議という計画で実施した。講演は、京都大学大学院法学研究科の土井真一教授をお招きして、「『みんなと共に自分らしく生きる』ための教育—自由で公正な社会の担い手を育む—」というテーマでお話を頂いた。憲法学の専門家からのお話は得ることが大変多かった。各教科の研究協議会の主題は以下の通りである。参加者は450名を超え、熱心な話し合いが行われた。



教科	研究協議主題
国語	生活に生きる言葉の学び
社会	「憲法」を持つ主催者を育てる授業づくり
数学	小中高の関連から見た中学校幾何の学習指導について(Ⅱ)
理科	理科における小中高一貫カリキュラムの展望(2)
音楽	小中高の一貫カリキュラムの実践—リコーダー単元に着目して—
保体	体づくり運動に関連して、Gボールの授業への位置づけと、その応用の可能性について
技術	メディア教育と情報教育に関する調査
家庭	中学校家庭科における指導内容の適時性について
英語	英語入門期指導を改めて考察する(3) —新「入門期指導」カリキュラムの実践を振り返って—

本校における公開研究会は、研究協議会という名称で実施されてきており、今年で34回を数えた。1997年から2000年までは、半数の教科が必ず発表を行うという形式で、2001年からは全教科による毎年開催が実施されている。

第56回高等学校教育研究大会報告

附属高等学校 宮崎明世

今年度の研究大会は12月2日(土)晴天の下、行われた。参加者総数は昨年より100名近く多い379名(一般267名、学生58名、招待者54名)であった。今年度は「高校生の発達と学校生活の援助—学校は資源の宝庫—」というテーマで、筑波大学附属学校教育局の石隈利紀先生のご講演を賜り、参加者から好評を得た。社会のニーズにあった内容と、現場の教師にわかりやすい先生のお話で、事後のアンケートの反応も良好であった。

講演に続き、各教科の公開授業を行ったが、教科によっては2コマの公開授業を実施した。公開授業のあと分科会を行い、全国からの参加者とともに、教科教育についての討議や日常の問題点などの意見交換をすることができた。

今年度は参加者が例年に比較して多く、狭い会場の中、参加者にはご迷惑をおかけする場面もあったが、今後なるべく多くの参加者を得られるよう努力していきたい。



教科	公開授業科目・テーマ		学年	担当者
国語	古文	背景から心情を読み取る—「能は歌詠み」(『古今著聞集』より)	2	黒澤弘光
地歴・公民	地理	年間を通じた地図指導の新たな工夫—デジタルマップ・旧版地形図の活用	1	田代 博
数学	数学Ⅱ	図形と式	1	矢野一幸
	数学A	個数の処理	1	大澤幾子
理科	生物Ⅰ	環境と生物の変化	1	藪 節子
保健体育	体育	男子バレーボール	2	藤生栄一郎
芸術	音楽	リコーダー合奏—附属小・中生との合同演奏に向けて	2	那須和子
外国語	OCⅠ	ITによる生徒の発話を促す工夫	1	橋 俊一
	英語Ⅰ	4技能を伸ばす総合英語の授業	1	山本良一
家庭	家庭基礎	家庭経済—暮らしと金融商品	2	西祐貴子

教科	教科分科会テーマ
国語	古典指導の問題点
地歴・公民	社会認知力向上への取り組み
数学	数学B「ベクトル」の扱いについて—次元を扱う教育内容としての検討
理科	現行教育課程が抱える課題
保健体育	体育の授業で何を学ぶのかⅢ—教師が考えるコミュニケーション能力と生徒の実態
芸術	「芸術科」の存在意義を考える
外国語	公開授業の検討会
家庭	高校家庭科と小・中・高一貫カリキュラム

スーパーサイエンスハイスクール5年間の軌跡と成果
—第33回教育研究会報告—

附属駒場中・高等学校 梶山正明

平成14年度に指定を受けたスーパーサイエンスハイスクール(SSH)事業も、今年で最終年度となりました。11月24日～25日に開催された第33回教育研究会では、第1日目に、土曜日を活用した「総合的な学習の時間」に実施している少人数学習「ゼミナール」(高校2年対象)などの授業を、各教科で公開しました。そして2日目には、「スーパーサイエンスハイスクール報告会—5年間の軌跡と成果—」と題し、本校の特色である全教科で取り組んだSSH事業の実践報告の後、パネルディスカッション「生徒・保護者・大学から見たSSH—筑駒SSHを評価する—」を開催しました。パネリストの松田良一氏(本校SSH運営指導委員、東京大学大学院総合文化研究科助教授)からは、「SSHを日本版APに進化させよう」と題し、SSHの卒業生を受け入れる大学として新しい試みの提案を頂きました。

また、大牟田透氏(本校卒業生保護者、朝日新聞東京本社科学医療部次長)には、文系へ進学した卒業生の親として、ジャーナリストとしての立場からご発言頂きました。本校からは、卒業生アンケートの実施に携わった大野新(教育実践プロジェクトⅠ委員長)がアンケートの結果を紹介し、フロアから4名の卒業生にも発言の機会が与えられました。その後、コーディネーターの熊倉啓之氏(静岡大学教育学部助教授)の進行で、フロアからの質疑も含めた議論が行われました。本研究会の報告書は、年度末に発行予定です。



私の学校の
名物先生
vol.7

附属久里浜養護学校の名物先生 — 井上昌士先生 —

附属久里浜養護学校副校長 馬場信明

附属久里浜養護学校は、知的障害のある自閉症児を教育の対象とする養護学校となり、筑波大学の附属学校となって3年目を迎えている。学校としては、その前身として重度・重複障害児のための養護学校として30年の歴史があり、その時々、個性豊かな先生方が活躍されていたと聞く。

今回は、附属学校となって3年目となる本校が「自閉症児のための教育課程の開発」というテーマに基づき、全校で取り組んでいる中、その中心となって活躍している研究主任の井上昌士教諭を紹介したい。

井上教諭は、平成16年4月に着任したときから研究部に所属し、その一員として収集したデータの分析や、関係部署との連絡調整に当たってきたが、その内容が自分にとっても納得がいくものなのかどうかという尺度をいつも持っているように思う。平成17年度に日本自閉症協会で作成



した啓発ビデオでは、本校の教育活動取材し取り上げられているシーンが多いが、ここにも井上教諭が登場している。小学部教室での個別学習にノートパソコンを使用し、課題をやり遂げ、井上教諭とハイタッチをするシーンで終わるのである。自閉症児の子どもたち、人間関係やコミュニケーションの持ち方に特有の障害がある故に、その子に合った人とのつながりを育てていきたい。私たちの思いを象徴するシーンでもある。

井上教諭は、社会の本校に対する自閉症教育への期待を受け止め、日々の教育実践を土台に教員、研究部員、研究推進委員会の連携を通して一つにまとめていき、研究開発学校としての取組みとして、その成果を全国に発信しようとしている。自閉症の子どもたちの教育に何が 필요한のか、日々彼らと向き合っている私たち教員の手で発信していきたいという思いがあると彼の姿から感じている。これをお読みいただいている皆様に、自閉症教育実践研究協議会(平成19年2月9日(金)開催予定)にご参加いただき、研究部の思いを、そして附属久里浜養護学校教職員の思いを感じとっていただけることを願って。

指導教員の取組み1

教育相談の活動

附属学校教育局 熊谷恵子

私は、附属学校教育局の中でもとくに教育相談に従事しているものです。普通附属学校の子どもの軽度発達障害(学習障害、AHDH、高機能自閉症等)などについての相談を主に受けています。また、軽度発達障害という点では、附属盲学校に通っている視覚障害児や附属聾学校に通う聴覚障害児などでも軽度発達障害との重複がある場合もあり、そのようなお子さんたちも対象です。個別式の知能検査や心理検査を行ったり、学習指導を行ったり、また、小集団でソーシャルスキルトレーニングをやったりしています。子どもの困っている様子が分析できたら、子どもの認知特性や自尊感情を重視した対応を行います。元気がなかった子どもたちが元気になっていく様子を見たりすると逆にこちらが励まされます。また、親御さんへのサポートについても同様に行っています。親御さんが子どもにおっかなびっくり接するのではなく子どもに自信をもって接してもらうことも大事なので、親御さんとお話させていただくこともたびたびあります。教育相談の内容は基本的には守秘義務があり不用意に他にもらすことはできませんが、相談の内容によっては、担任の先生やお医者さんとの連携をとることもあります。

平成19年度から、特別支援教育がはじまり、特別支援学校はもちろんのこと、通常の学校の中でも特別な教育的ニーズをもったお子さんを支援することになりました。附属学校でもそれは同じです。一口に特別支援教育と言っても、なかなか対応がむずかしい場合もあります。そんな時に、大塚地区にある教育相談室(03-3942-6850)にご連絡をください。

指導教員の取組み2

伝統ある附属学校を核とした教育研究の醍醐味

— 教職教育・教育実習指導とカリキュラム研究 および教育史資料に関わって —

附属学校教育局 木村範子

教育分野としての私は、これまで主として以下の三点に関わりを持ってきた。

第一に、教職教育と教育実習指導・研究では、高い指導水準を有する附属の先生方のご協力を得ながら、教職指導の実績・教職研究として、内外に示していくこととともに今後の教育実習指導を含めた大学教育における教職教育の充実の方策を研究している。第二に、教科・教科外のカリキュラム研究・授業開発では、家庭科・総合・特別活動の小中高一貫のカリキュラム開発の研究等を通して、日々の授業研究にも関わっている。各附属学校の教育実践をより良くしていくとともに、普通附属と特別支援附属のそれぞれの持ち味を生かした研究交流と教育実践が行われる機会を多く持つ研究組織上の工夫を今後もはかっていきたい。第三に、附属学校教育史資料の整理・保存・研究では、明治以来の伝統ある附属学校ならではの重要なことである。貴重史料については文化財保護の観点からも、特に優先的に保存・修復をはかっていくとともに、未整理のものについて整理し、附属学校史研究の推進にも役立つように現在力を尽くしているところである。

教育研究とは深く地道なものである。附属学校の力のある先生方による教育研究風土の歴史と伝統に支えられた本物の教育研究の醍醐味を満喫しながら、厳しい時代であっても教育の普遍的な豊かさを内外の人々と共有していきたいと願っている。

朝永振一郎先生の思い出

附属中学校 角田睦男

私が東京教育大学で朝永先生の講義を聞いたのは昭和45年(1970年)のことです。もう36年も前のこととなります。大分記憶も遠くなっているのですが、先生の生誕100年の記念ということですので、思い出の一端をご紹介しますので、いただきたいと思います。

私が東京教育大学に入学した時には、先生は学長の任期を終えられ、理学部の教授として「物理学概論」の講義をもっていらっしゃいました。ご承知の通り、1968年当時は全国的な規模で大学が大きく揺れていたときでして、東京教育大学も「筑波移転」の是非を巡って学生だけでなく教授会の中でも賛否両論が渦巻いていました。私は1学年としてこの「物理学概論」の授業を聴講していたわけですが、先生の講義の中で統計的な分布(正規分布)の説明に自作(おそらく)のパチンコ台のような装置を持ってこられて上端から一気にパチンコ玉を流し、台の下端付近にパチンコ玉が正規分布する様子を見せて下さったのが特に印象に残っています。また、先生は粋な洒落が好きで、大の落語ファンだということも学生にはよく知られていましたので、最終講義のときに「先生、落語を一席お聞かせ願えませんか。」と申し上げたところ、暫く考え込まれた後に「こういうご時世ですから、なしにしましょう。」とお話されました。これも私の記憶に残る1ページになっています。先生の教えを受けた一人として、次の世代を生きる中学生に科学の楽しさと美しさを伝えていきたいと考えております。

《編集後記》

附属学校教育局での広報誌のポローニアもすでに8号を数える。今回も内容は多岐にわたり、ここ一年あまり編集・発行の手伝いをしてみて、その大変さがわかる。本誌が所期の目的を達しているかどうかは、読者の評価を待つしかないが、記事には執筆者や関係者の思いが真摯にあらわれており、読み応えがあって面白い。ところで、特別支援学校の新しい姿についての鼎談、「科学の芽」賞の創設の意義などその時々々の旬のモノをいち早く読者に伝える記事と、これまで連載的に分担して書かれている紹介記事の取り合わせに、附属学校教育局の実態がよく現れているようにも思う。教育の特性かもしれないが、教育の政策の推進と、日々の教育活動の継続のふたつの使命が、構造の根っこにあり、その配分やバランスを調整する役割をあるいはこのポローニアは持っているのかもしれない。

最後になったが、次長の鳥山先生の退職にあたってのご自身のこれまでの歩みが書かれている。障害教育のスペシャリストとしての姿に敬服する次第である。今後の先生のますますのご発展とご健康を心より祈念してやまない。

(江口勇治)

ポローニア
paulownia

vol.8

発行日……平成19(2007)年1月31日

発行者……附属学校教育局教育長 谷川彰英

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
ポローニア編集委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

編集委員長……篠原吉徳

編集委員……生田 茂・江口勇治・菅野和恵・下山晃司
青山由紀・間々田和彦・大村寛男

デザイン……スピーチ・バルーン

印刷……広研印刷 使用紙:UJimax mm [日本製紙]